日本教育新聞
平成26年（2014年）9月22日（月曜日）

幼稚園 保育園

動物飼育を通して 思いやりの心育む

武蔵野大学附属幼 東京・西東京市

ウサギ、フェレット、チャボ…小さな命との日常的な触れ合い。他者の気持ちを想像できる思いやり。決められた当番など自分の役割を自覚して取り組む意識。園での動物飼育は子どもたちにとって多くの示唆を与えてくれる。園児自ら動物の世話に取り組む飼育当番を通して、情操面を育んでいる園の実践を紹介する。

東京都西東京市の武蔵野大学附属幼稚園（北岡和彦園長、園児286人）は、仏教の考えに基づいた保育を進める園だ。その一環として、学校動物の飼育から得られる学びも大切にしている。

同園の飼育体制は飼育当番を年中、年長の園児たちが分担する。年中児はウサギ、年長児はチャボだ。飼育当番は1日に2人。毎朝、飼育小屋や動物のトイレのお掃除をする。

園児たちが「自分の力でお世話できたという気持ちになれる」よう、あまり無理強いはしない当番制だ。ただ、ここの園児たちは年少時から、上の学年が当番に参加しているのを見て、日常的に動物に触れている。そのためだんだんと、自然に「自分もお世話したい！」という気持ちが湧いてくるという。

朝9時。順次登園してきた子どもたちが、思い思いの遊びに取り組み、園内はにぎやかだ。そんな中、園庭の一角にあるチャボの小屋には5人の園児が集まっていた。

園児1人につき1カ月に1回ほど回ってくる飼育当番。ただこの日は、夏休み明けということもあり、久しぶりの子どももいた。そんな「お掃除のやり方を忘れてしまった」という園児のため、3人がお手伝いの助っ人に参じたのだ。

まずはチャボを小屋から追い出し、ほうきやちり取りを使って食べ残しやふん、抜けた羽を取り除く。完璧にきれいにはできなくとも、子どもたちなりにどうしたら動物がもっと居心地良く過ごせるかを考えていた。

園庭の「にわとりキッチン」に立ち寄ると、真剣な顔でチャボたちの朝ご飯を作る園児たちの姿。野草を細かく刻み、貝殻や卵の殻を砕いたものを米と混ぜ合わせて完成。自分たちで作った餌をチャボに持っていく園児たちの表情は、どことなく誇らしげだ。

お掃除中、チャボを小屋の外へと出す園児

「にわとりキッチン」でチャボの餌を準備中。どの園児も真剣な表情

掃除や餌を準備 誇らしげ

◇

言葉が遅れていたり、人と話すことが苦手な子が、動物のそばに居場所を見つけることもある。普段は言葉がうまく出せないという年長のある男児は、園庭の一角に座り毎日チャボと遊ぶのを日課にしている。

まだチャボを怖がる子どももいる中、とても丁寧に、いとおしそうに小さな両手で包み込み、大切にかわいがっていた。動物の存在は、気になる子どもの情緒を落ち着かせ安定した園生活にも一役買っている。

そんな動物と過ごした記憶は、時には卒園した後も心に強く残るものだという。中でも以前飼っていたフェレットは多くの園児の心をつかんだ。今でも卒園生が餌をあげにやってきたり、このフェレット宛てに、時折、手紙が届くほど。また、ある卒園生も「幼稚園のころ、うまく友達がつくれないときも、動物がいたから寂しくなかった」と振り返る。

このように子どもたちが心置きなく動物飼育を楽しむためにも、地域の理解・協力が大切だという。

会話の苦手な子 居場所に

ウサギのトイレも自分たちできれいに洗う

同園でも近隣の獣医師による年間を通じた飼育相談・診療により、動物や子どもたち、職員が安心して生き物を飼うことができているからだ。

同園の井上悦子主事は「幼児期に動物と過ごすことは、人の気持ちを理解するために大切なことを教えてくれます」と語る。

身近な生き物から、他者を大切にすることを学ぶ動物飼育は、古くてなお新しい取り組みだ。

武蔵野大学附属幼＝☎042・468・3169